

## 生化学若い研究者の会「第56回生命科学夏の学校」開催報告

西村 亮祐<sup>1</sup>, 権 秀珍<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>生命科学夏の学校実行委員長 東北大学, <sup>2</sup>事務局長 東北大学)

「生化学若い研究者の会（略称：生化若手の会）」は、生命科学系全般の研究に関わる大学院生を中心に構成されており、日本生化学会後援のもと、全国各地でシンポジウムやセミナーなどを企画し、若手研究者のネットワークづくりを進めています。他にも、アウトリーチ組織「キューベット委員会」では、ライフサイエンス誌へのコラム連載や一般向け書籍などの執筆活動も行っています。

そして、当会最大のイベントとして、毎年、若手研究者向け滞在型研究会の「生命科学夏の学校」を企画しています。56回目となる今年は8月26日～28日に旅館かつらや（宮城県白石市）にて開催しました。東北地方での開催は、1972年（第12回）以来実に約半世紀ぶりのことです。幅広い年齢層・研究分野の参加者が、全国から123名（内、講師14名）集まりました。

### 第56回の企画主旨

本年度は「あなたの夢は何ですか？」をキャッチフレーズに、「夢を語れる夏学」「未来を語れる夏学」をテーマに掲げて企画を行いました。日常の研究生活から離れ、同じ志を持った仲間が全国から集うこの夏の学校で、改めて自身の夢について考えていただきたい。そして、最先端のトピックの講演や参加者同士の議論を通じて、生命科学の未来について共に考えるきっかけを提供したい。このような思いの下、本年度の夏の学校を開催しました。

### ワークショップ

夏の学校のメイン企画であるワークショップには、11名の先生方をお招きしました。「光が照らす生命科学の未来」「生化学で切り拓くタンパク質新素材の未来」といった講演タイトルからも見て取れるように、生命科学の未来に思いを馳せられるような最先端のトピックについてお話しいただきました。そして、講演の最後に先生方からいただいた若手への力強いメッセージには、多くの参加者が勇気づけられました。また、3日目には「研究を分かりやすく伝えるビジュアル制作」「統計解析ソフトRハンズオン」の二つの実習型ワークショップを開催し、参加者のニーズに合った知識や技術を身に付ける機会を設けました。

### シンポジウム

昨今、「多様性」の推進が社会的に推奨されています。

今回のシンポジウムでは、研究における多様性とはそもそも何か？ 本当にそれは重要なのか？ そして、私たち若手研究者は多様性社会をどう戦略的に生きていくべきか？ という三つの疑問に答えるべく3名の講師をお招きし、2時間半にわたる議論を展開しました。

第1部「多様性は望ましいのか」では、科学における多様性について哲学的に研究されている伊勢田哲治先生（京都大学）にご講演いただきました。また、科学者社会における多様性の確保の重要性について、社会認識論の知見に基づいた議論もしていただきました。続いて第2部では、「多様性社会の中で輝くには」をテーマに、実際の研究現場における多様化の例として、大隅典子先生（東北大学）には「男女共同参画（性別の多様性）」、前多隼人先生（弘前大学）には「地方創生（地域の多様性）」について、それぞれ実例を交えてお話しいただきました。

講演の後はグループワークを設け、「理学系部に女子学生を増やすための施策」や「地方と都市の研究環境の違い」など五つの課題について議論しました。参加者各々が置かれた状況や考えを共有していく中で、当たり前と思っていた自身の研究環境に感謝する場面や、問題点に気づき改善点を真剣に話し合う姿が見られました。明確な回答を出すのは難しい課題ではありましたが、参加者それぞれに新しい気づきがあったことが事後アンケートからも見て取れました。

### 研究交流企画

参加者の交流促進を図る研究交流企画として、「研究交流会」「ポスターセッション」「自由集会」の三つの企画を用意しました。「研究交流会」では、初対面の参加者と話すきっかけ作りのために、各々の研究内容や趣味などを紹介し合う場を提供しました。「ポスターセッション」では、様々なバックグラウンドの参加者による研究発表が行われ、活発な意見交換が行われました。また「自由集会」では、有志からテーマを募集し、小グループに分かれて討論・交流を行いました。普段の研究生活に関するものや今後のキャリアに関するものから、「あなたの研究をゲームにしよう」といったユニークなものまで、幅広いテーマが集まりました。続いて行われた懇親会では、ポスターセッションや自由集会の時間では語り尽くせなかった議論を続ける参加者らの姿も見られ、講師の先生方も交えて夜遅く



写真1 集合写真



写真3 シンポジウム



写真2 ワークショップ



写真4 研究交流企画

まで大いに盛り上がりました。

#### 約半世紀ぶりの東北開催

今回の夏の学校には、「全国から100名以上の若手研究者が集まるこの研究会を、地方でも開催することで、地方の研究コミュニティを活性化させたい」という、もう一つの思いが込められていました。これまで夏の学校は、三大都市圏近郊で開催されることが多かったのですが、東北開催となった今回は、今まで地理的な障壁から参加者の少なかった北海道・東北から、近年最多の40名以上の参加がありました。また、数年前までメンバー数1桁という状況が続いていた当会の東北支部も、今回の夏学終了後には総勢80名を超える大所帯に成長し、活発に活動しています。東日本大震災から5年という節目を迎えた2016年、被災地の宮城に一人でも多くの方に足を運んでいただくという意味でも、今回の約半世紀ぶりの東北開催は意義深いものであったと考えます。

#### 分野、地域の垣根を超えたつながりを夏の学校から

今年の夏の学校でも、分野の垣根を越えた多くのつながりが生まれ、たくさんの夢が語られました。私たちは、この夏の学校を、参加者が夢を実現していくためのきっかけにしてほしいと考えています。全国8支部からなる当会の支部活動も、近年これまでにない盛り上がりを見せています。夏の学校で得たつながりを、各支部での活動や学会でさらに深め、また1年後、夏の学校に戻って来ていただきたいと願っています。

最後に、今回の夏の学校の開催にあたり、多大なご支援をいただいた日本生化学会をはじめとする法人・企業の皆様、ご講演いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

(生化学若い研究者の会・第56回生命科学夏の学校についてはこちら；<http://www.seikawakate.org>)